



ヨコハマトリエンナーレ 2014

第3回 記者会見資料

展覧会構成、第1弾参加作家発表

日時：2013年12月13日(金) 16:00—17:15
会場：横浜美術館 レクチャーホール

本資料についてのお問い合わせ ※広報用画像のお申込は、下記宛先までご連絡ください。

横浜トリエンナーレ組織委員会事務局（担当：武井）
〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1 横浜美術館内
TEL 045-663-7232 FAX 045-681-7606
E-MAIL press@yokohamatriennale.jp
URL <http://www.yokohamatriennale.jp>

目次

展覧会構成	2-3
参加作家（第1弾発表、計7組）	4-6
展覧会企画体制	7
ビジュアルデザインについて	8
「まちにひろがるトリエンナーレ」について	9-10
開催概要	11
開催実績及び横浜トリエンナーレ組織委員会組織図	12



展覧会構成

ヨコハマトリエンナーレ2014 アーティスティック・ディレクター 森村泰昌

「忘却巡り」の旅に出る

私達はなにかたいせつな忘れ物をしていないだろうか。気がつかないまま先に進んでしまったり、ホントは気がついているのに、知らないふりをして立ち去ったり。

そういう「忘却」の領域に敏感に反応する芸術表現がある。表現者がいる。

ヨコハマトリエンナーレ2014は、人生のうっかりした忘れ物、人類の恒常的な忘れ物、現代という時代の特殊な忘れ物などを憶い出すための、いわば「忘却巡り」の旅である。その旅程は、おおよそ次のような流れとなる。

沈黙とささやきの旅

黙っているものは情報化されずに忘れられていく。ささやきは耳をそばだてないと聞こえない。これらかすかな情報のなかにある、じつに豊かな広がりを感じとる旅。

華氏451の旅

人類の歴史に繰り返し登場する、思想統制という強制的になにもものが抹殺される悲劇。これを冷静に見つめなおす旅。

無用への旅

役に立たなければ廃棄され忘れられる。それでも光り輝く手だてがある。その手だてが芸術である。無用への旅の途上で、私達はほんとうの芸術に出会えるはずである。

恐るべき子供達に会いに行く旅

人間はおとなになることと引きかえに、幼年期の記憶を捨てなければならない。ところが、この幼年期の記憶に深くとらわれて、前に進めなくなってしまう人々がいる。その典型が芸術家である。芸術家とは、おとなになりそこねた子供なのである。おとなになって忘れてしまった、私達人間の生まれいずる源へと帰郷する旅。

忘却の海に漂流する

すべてを見終わった旅人(観客)が、最後に目にするのは、茫漠たる忘却の海である。それは記憶や情報がおよびもつかない、広大な世界である。旅人はこの忘却の海へと漂流する。それぞれの到達点を探し出す、それぞれの旅がここから始まる。



語らぬこと、語ってはならぬこと、語りえぬこと。見えぬもの、見てはならぬとされるもの。とるに足らぬ出来事、なんの役にも立たぬ行為。

これら記憶世界にカウントされる値打ちもないと判断された無数の記憶されざる記憶達に目を向ける旅。私達のまなざす力を育む旅。

ヨコハマトリエンナーレ2014が目指すのは、そんな心の旅物語である。



©Morimura Yasumasa + ROJIAN

森村泰昌 (もりむら やすまさ)

1951年、大阪市生まれ、同市在住。京都市立芸術大学美術学部卒業、専攻科修了。

1985年、ゴッホの自画像に扮したセルフポートレート写真を発表。以後、一貫して「自画像的作品」をテーマに、美術史上の名画や往年の映画女優、20世紀の偉人たちに扮した写真や映像作品を制作している。

1988年、第43回ヴェネチア・ビエンナーレ、アペルトに出品したほか、国内外で多数の展覧会に出品している。

主な個展に、「美に至る病—女優になった私」(横浜美術館、1996年)、「空装美術館—絵画になった私」(東京都現代美術館、他2館、1998年)、「私の中のフリーダ/森村泰昌のセルフポートレート」(原美術館、2001年)、「美の教室、静聴せよ」(熊本市現代美術館、横浜美術館、2007年)、「Requiem for the XX Century. Twilight of the Turbulent Gods」(La Galleria di Piazza San Marco、ヴェネチア、他ニューヨーク、パリに巡回、2007、2008年)、「なにものかへのレクイエム—戦場の頂上の芸術」(東京都写真美術館、他3館、2010、2011年)など。文筆活動も精力的に行っており、近著に『森村泰昌「全女優」』(二玄社、2010年)、『まねぶ美術史』(赤々舎、2010年)、『対談集 なにものかへのレクイエム—20世紀を思考する』(岩波書店、2011年)など。

2006年度京都府文化賞・功労賞、2007年度芸術選奨文部科学大臣賞、2011年に第52回毎日芸術賞、日本写真協会賞・作家賞、第24回京都美術文化賞の各賞を受賞。同年、秋の紫綬褒章を受章。2013年に平成25年度京都市文化功労者として表彰を受ける。



参加作家 (アルファベット順)

※写真は参考作品または作品イメージです。

釜ヶ崎芸術大学 / Kama Gei

2012年、大阪市にて開校。

釜ヶ崎芸術大学は、2012年に特定非営利活動法人「こえとことばとこころの部屋(ココルーム)」が始め、大阪市西成区の釜ヶ崎と呼ばれる地域を会場として実施している。書道、芸術、表現、詩、天文学などの多彩なテーマで、専門の講師とともに講義やワークショップを行う。ここでは教える側も教えられる側も互いに学びあう喜びを知り、生きる力とすることに主眼が置かれている。日雇い労働者のまち(寄せ場)の歴史を持つ釜ヶ崎で学ぶことは、日本の近代化の裏で忘れられてきたことや、忘れさられた人生を生きてきた人に出会うことでもある。高齢化がすすむ地域に根ざしながら、地域を問わずすべての人々に門戸が開かれ、無料、あるいは自分の望む金額で誰もが授業を受けることができる。本展では、同大学の釜ヶ崎での様子の紹介や、会場内での出張授業などを予定。横浜と釜ヶ崎の人的交流を通じ、ともに明日に漕ぎだす術を学びあう。



絵画の授業の様子

マイケル・ランディ / Michael LANDY

1963年、ロンドン(イギリス)生まれ。ロンドン在住。

1988年、ダミアン・ハーストラと共に自主企画展「Freeze」に参加、YBAs(ヤング・ブリティッシュ・アーティスト)の一員として知られ、美術作品をめぐる「所有」や「廃棄」といった行為を作品化していく。《Break Down》(2001年)では、彼自身が所有していた全ての物品(車・出生証明書・本・他人の美術作品など7,227点)をリスト化した後、丸2週間かけて破壊する様子を作品として発表した。本展では、このコンセプトを継承して2010年にロンドンで発表された参加型のプロジェクト《Art Bin》(約600m³の大きさに及ぶ芸術のためのゴミ箱)が横浜版として再構成される。《Art Bin》とは、創造的活動に従事する人が、その創作の過程で生まれた失敗作や過去の作品を持ち寄り、ゴミ箱の形状をした巨大な容器にそれらを実際に捨てることで成立する「創造的失敗のモニュメント」である。



《Art Bin》2010
サウス・ロンドン・ギャラリーでの展示風景

メルヴィン・モティ / Melvin MOTI

1977年、ロッテルダム(オランダ)生まれ。ロッテルダム在住。

オランダ、ティルブルフの美術アカデミーとアムステルダムでのアトリエで学んだモティは、独自の視点から、忘却された出来事、隠された歴史的事実や逸話などを主題に選び、綿密な調査と研究を経て映像化する。第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ(2013年)では企画展「Encyclopedic Palace」に出品。また、2014年5月には、森美術館のMAMプロジェクトで新作を発表予定。本展に出品する《No Show》(2004年)は、第二次世界大戦中に戦火を恐れて収蔵品を館外へ避難させた空っぽのエルミタージュ美術館で、ギャラリーツアーを行い続けた、ある男性職員の話をもとに再現したもの。柔らかな光が差し込む静謐な画面に揚々と熱心に作品解説する声が響き渡る。



《No Show》2004
第二次世界大戦中のエルミタージュ美術館テント・ホールの様子を伝える資料写真

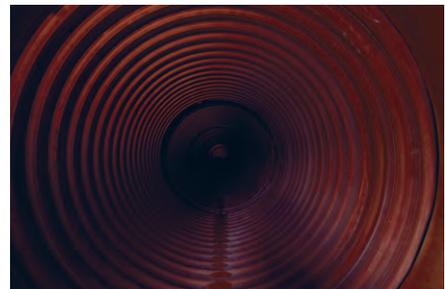
**参加作家** (アルファベット順)

※写真は参考作品または作品イメージです。

グレゴール・シュナイダー / Gregor SCHNEIDER

1969年、ライト(ドイツ)生まれ。ライト在住。

10代初めより作品制作を始め、1985年、16歳の時に地元のギャラリーで初個展を開催。同年より壁の前に壁を建てたり、部屋の中に部屋を設けたりして自宅を改造する作品《Haus u r》(家 u r)に着手。同作は、その後現在に至るまで(そしておそらくは生涯)続けられる作家の代表作といえよう。同様に自宅の部屋を複製しつつ、別の空間で再構成する《Dead House u r》(死の家 u r)は、2001年のヴェネツィア・ビエンナーレ(ドイツ館代表)で金獅子賞を受賞。本展では、このように時間と空間をねじ曲げ、その記憶を混乱させるサイト・スペシフィックなインスタレーションを多数手がけてきたシュナイダーによる、アジア初の本格的な大規模インスタレーション作品を展示予定。



《DEAD END》2011
マドリード現代美術センターでの展示風景
© Gregor Schneider / VG Bild-Kunst Bonn

高山 明 / TAKAYAMA Akira

1969年、さいたま市生まれ。

ドイツで演劇を学び、東京を拠点に演出家として活動。2002年より、演劇・パフォーマンスユニットPort B(ポルト・ビー)主宰。実際の都市を会場/舞台に、従来の演劇の枠組みを超えた実験的な作品を発表する。観客自身が移動しながら作品を体験し、街そのものがインスタレーションと化すような「ツアー・パフォーマンス」や、虚構と現実とが交錯する状況を生み出す社会実験的なプロジェクトなどにより、現実社会に対する参加者の認識自体が問い直されていく。本展では、現在横浜に暮らしアジア各地にルーツを持つ人々と仮設コミュニティを作り、横浜市内を移動/漂流しながら、停泊地ごとに変化する舞台セットを制作予定。対話や個々人の営みを通して、横浜の今が浮き彫りになるような、リサーチ型のプロジェクトを計画している。



《東京ヘテロトピア》2013
フェスティバル/トーキョー 13
Photo: HASUNUMA Masahiro

和田昌宏 / WADA Masahiro

1977年、東京都生まれ。東京都在住。

ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ卒業後、東京を拠点に活動。映像、彫刻、インスタレーション、パフォーマンスとその表現形式は多岐にわたる。近作の映像インスタレーション《「イチユマデモ キミウォ アイ スユテル」主婦のためのスタイリッシュなハエ》(2012年)では、相容れない組み合わせとしての「主婦」と「ハエ」をキーワードに夫婦、親子といった家族の関係について言及し、また、《RECORRIDO ARQUEOLOGICO #1》(2013年)では、メキシコでのレジデンス中の体験をもとにその土地の歴史と自らの記憶とを重ねあわせ、異文化との出逢いと融合の過程を映像で描き出す。このように和田は、日常で出会う、一見相互関係が見いだせないような出来事を拾い上げ、そこに潜む事実を丹念に洗い出し、作品化していく。本展では新作の映像インスタレーションを発表予定。



《「イチユマデモ キミウォ アイ スユテル」主婦のためのスタイリッシュなハエ》2012
ビデオ



参加作家 (アルファベット順)

※写真は参考作品または作品イメージです。

やなぎみわ / YANAGI Miwa

1967年、神戸市生まれ。京都市在住。

京都市立芸術大学大学院美術研究科を修了。商業施設に佇む制服姿の案内嬢をとらえた「エレベーターガール」、女性に50年後の自分を想像してもらい、その姿を再現した「マイ・グランドマザーズ」をはじめ、CGや特殊メイクを駆使した写真のシリーズを制作。ジェンダー、若さと老い、美と醜といった女性を取り巻く諸問題への深い洞察を試みる。2001年の横浜トリエンナーレ、2009年のヴェネツィア・ビエンナーレ（日本館代表）に参加。2010年からは演劇にも取り組み、演出、脚本、美術、衣装デザインなどを手がけている。あいちトリエンナーレでの「ゼロ・アワー 東京ローズ最後のテープ」に続き、2014年には唐ゼミ版「パノラマ」が上演される。本展では、中上健次の『日輪の翼』を舞台化した新作演劇のための移動舞台車を発表する。



台湾の移動舞台車
Photo: YANAGI Miwa



展覧会企画体制 (2013.12.13現在)

アーティスティック・ディレクター

森村泰昌

アソシエイト (五十音順)

作家・作品選定過程においてアーティスティック・ディレクターを支援する専門家
(*展覧会グループを兼任)

天野太郎(横浜美術館)*

大館奈津子

柏木智雄(横浜美術館)*

神谷幸江(広島市現代美術館)

林 寿美(インディペンデント・キュレーター)*

展覧会グループ

木村絵理子(横浜美術館)

松永真太郎(横浜美術館)

大澤紗蓉子(横浜美術館)

庄司尚子(横浜美術館)

水谷英智(横浜市芸術文化振興財団)

田中 彩(横浜市芸術文化振興財団)

鈴木祐子(横浜トリエンナーレ組織委員会)

会場空間構成

日埜直彦(日埜建築設計事務所)



ビジュアルデザインについて

B1ポスター 2種



ヨコハマトリエンナーレ2014のポスターをはじめとするビジュアルデザインは、イメージの版を彫ることで本展キーワードとなる「忘却の海」を再現しています。

本デザインは、グラフィックデザイナーの有山達也氏によるディレクションのもと、横浜市在住アーティストの葛西絵里香氏が版を彫ることで実現しました。タイトルの筆文字は、本展参加作家のマイケル・ランディ氏によるものです。

本デザインは、白と黒の対となるイメージで構成しています。白いイメージの、一見真っ白な余白には、“版を彫る”という膨大な手作業の跡がかすかに残っています。他方、イメージの元となる版を撮影したもう一つのビジュアルが、その彫る行為を際立たせる答えとして存在します。本展のビジュアルデザインは、私たちが普段忘れてしまっているものにこそ大切なものがある、そこに目を向けるという展覧会のコンセプトを可視化しています。

有山達也 / ARIYAMA Tatsuya

グラフィックデザイナー

1966年、草加市生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。中垣デザイン事務所にデザイナーとして約3年勤務。1993年、アリヤマデザインストア設立。雑誌『ku:nel』（マガジンハウス）や、北九州市の情報誌『雲のうえ』のアートディレクションのほか、『一九七二』（坪内祐三／文藝春秋）、『100の指令』（日比野克彦／朝日出版社）、『猫にかまけて』（町田康／講談社）の装幀を手がけるなど、エディトリアルを中心としたグラフィック全般のアートディレクション、デザインを担当。第35回講談社出版文化賞ブックデザイン賞受賞。

葛西絵里香 / KASAI Erika

ハンコアーティスト

1982年、横浜市生まれ。10代の頃よりリノリウム版によるハンコ制作を始める。女子美術大学短期大学部専攻科修了。一貫して手作業による彫りとその版の印刷に関心を抱き、文字のかたちに着目した作品をはじめ、微細な線や網点を彫り込んだ千個を超えるハンコを用いた作品など、彫りと印刷による表現の可能性を探求している。書籍の装画や挿絵を中心に、「リノリウム・スキン」（2008年）や「玉」（2009年）など個展を開催し、2003年には『一九七二』（坪内祐三／文藝春秋）のタイトル版画制作を行なった。

マイケル・ランディ / Michael LANDY

参加作家（4P）参照



「まちにひろがるトリエンナーレ」について

● 連携の概要と応援企画の募集

横浜市では「創造都市横浜」を掲げ、横浜の強みである「港を囲む独自の歴史や文化」と「文化芸術の持つ創造性」を活かして、都市の魅力を高めていく創造都市政策を推進してきました。横浜トリエンナーレは、創造都市横浜のリーディングプロジェクトとして位置づけられ、第4回展（2011年）では創造界限拠点（次頁参照）等のアートプロジェクトと連携し、まち全体でトリエンナーレを盛り上げました。本展でも、創造界限拠点をはじめ、市内の各事業者とも連携を図り、「まちにひろがるトリエンナーレ」を推進します。

1 創造界限拠点との連携

ヨコハマトリエンナーレ2011では、同じ会期で開催されたNPO法人BankART1929、NPO法人黄金町エリアマネジメントセンターによるプログラムを「特別連携プログラム」とし、特別連携セット券の販売や会場間バスの運行を行いました。

ヨコハマトリエンナーレ2014では、5つすべての創造界限拠点（BankART Studio NYK、初黄・日ノ出町地区、象の鼻テラス、急な坂スタジオ、ヨコハマ創造都市センター）と連携する予定です。

2 応援企画

企業や商店街、市民の皆様によるヨコハマトリエンナーレ2014を応援していただける企画を募集します。

① 応援プログラム*

ヨコハマトリエンナーレ2014の会期中に開催される文化芸術拠点、NPO団体等が主催するイベント・企画を募集し、広報連携を図ります。

② 応援グッズ*

ヨコハマトリエンナーレ2014の「応援ロゴ」を使用し、独自にグッズを開発することを希望する事業者を募集します。

※①②の企画の募集要項等は、横浜トリエンナーレ公式ホームページ（<http://www.yokohamatriennale.jp/2014/join/index.html>）をご参照ください。

● 東アジア文化都市2014横浜特別事業としての開催

横浜市は2014年から新たにスタートする「東アジア文化都市」に正式決定されました。「東アジア文化都市」は、日中韓3か国の開催都市で文化芸術イベント等を実施し、東アジア域内の相互理解・連帯感の形成を促進するとともに、同地域の多様な文化の国際発信力を高めていくことを目指す事業です。ヨコハマトリエンナーレ2014は、「東アジア文化都市2014横浜特別事業」として位置づけられています。



東アジア文化都市
2014横浜
Culture City of East Asia
2014, YOKOHAMA



創造界隈拠点の概要

横浜市の創造都市政策の中で、アーティストやクリエイターが創作・発表・滞在(居住)することで街の活性化を図る「創造界隈の形成」を進めています。創造界隈拠点とは、横浜臨海部の歴史的建造物や倉庫、空きオフィスなどを創造的活動の場に転用し、その活動を発信する拠点施設です。

BankART Studio NYK (日本郵船横浜海岸通倉庫)

2005年1月開設。運営はNPO法人BankART1929。

倉庫の大空間を生かし、ホール、ギャラリー、スタジオ、カフェ等を備えたオルタナティブスペースとして、先駆的な文化芸術の創造と発信を行っている。

現代美術家による大規模な個展やアーティスト・イン・レジデンスプログラムを実施。他にも、台北市とのアーティスト相互派遣や韓国との交流プログラムを継続的に実施している。



© BankART1929

初黄・日ノ出町地区

運営は、2009年4月に設立したNPO法人黄金町エリアマネジメントセンター。

「アートによるまちづくり」を理念に掲げ、地域、企業、大学、警察、行政が協力し、安全・安心のまちづくりを推進。2008年より毎年、現代アートの展覧会「黄金町バザール」を開催する他、アーティスト・イン・レジデンスや地域と連携したまちづくりの事業を展開している。今後は、地域活動ビジョンづくりなどをとおして、アートによるまちづくりを更に推進していく。



Photo: Yasuyuki Kasagi

象の鼻テラス

2009年6月設立。運営は株式会社ワコールアートセンター。

開港150周年記念事業として横浜港発祥の地に整備された象の鼻パーク内の、アートスペースを兼ね備えたレストハウス(休憩所)。さまざまな人や文化が出会い、つながり、新たな文化を生む場所を目指し、アート、パフォーマンス、音楽など多ジャンルの文化プログラムを随時開催。



SLOW LABEL THE FACTORY 2
Photo: 427FOTO

急な坂スタジオ (旧老松会館)

2006年10月開設。運営はNPO法人アートプラットフォーム。

かつて市営の結婚式場であった施設を、舞台芸術の創造拠点として位置づけ、4つのスタジオとホールからなる稽古場として活用している。

横浜発のカンパニーや作品を創出することを目指し、アーティストに対する制作支援を実施しているほか、国内外の劇場や団体と連携した公演にも積極的に取り組んでいる。



ヨコハマ創造都市センター (旧第一銀行横浜支店)

2009年5月設立。運営は(公財)横浜市芸術文化振興財団。

横浜を代表する歴史的建造物である「旧第一銀行横浜支店」を活用した施設で、創造都市横浜のセンターとして、アーティスト・クリエイターの誘致やまちづくり、ビジネスとのマッチング、企画実現のための助成金交付事業など、まちとアートと各拠点をつなぐ活動のサポートを行っている。





開催概要

展覧会タイトル

ヨコハマトリエンナーレ2014「華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」
Yokohama Triennale 2014 "ART Fahrenheit 451: Sailing into the sea of oblivion"

会期

2014年8月1日(金)ー11月3日(月・祝) 開場日数：89日間 ※休場日：第1・3木曜日(計6日間)

アーティストック・ディレクター

森村泰昌

主会場

横浜美術館 横浜市西区みなとみらい3-4-1
新港ピア(新港ふ頭展示施設) 横浜市中区新港2-5

開場時間

10:00ー18:00 [8月9日(土)、9月13日(土)、10月11日(土)、11月1日(土)は20:00まで開場]
※入場は閉場の30分前まで

主催

横浜市、(公財)横浜市芸術文化振興財団、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会

※事業の総称および組織名は「横浜トリエンナーレ」(横浜=漢字表記)、第5回展の事業名は「ヨコハマトリエンナーレ2014」(ヨコハマ=カタカナ表記)となります。

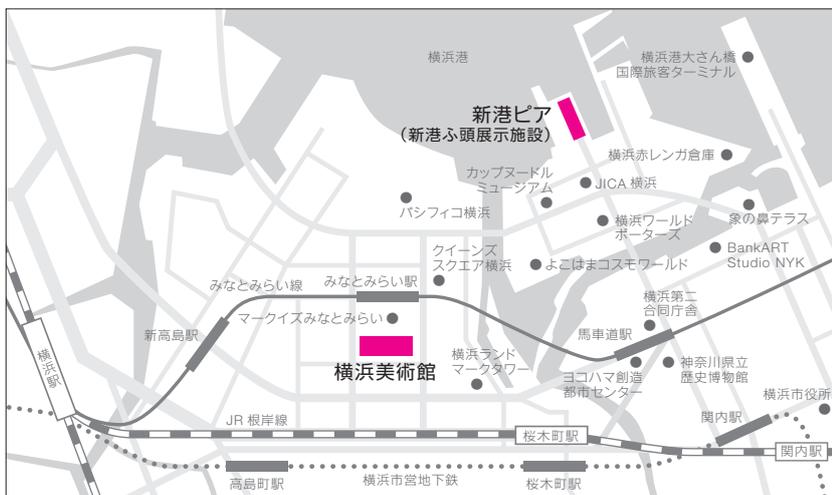
交通アクセス

横浜美術館

みなとみらい線(東急東横線直通)「みなとみらい駅」下車、3番出口より徒歩3分。
JR線および横浜市営地下鉄線「桜木町駅」下車、「動く歩道」を利用、徒歩10分。

新港ピア(新港ふ頭展示施設)

みなとみらい線(東急東横線直通)「馬車道駅」より徒歩13分。





これまでの開催実績

開催年	2001年(第1回)	2005年(第2回)	2008年(第3回)	2011年(第4回)
テーマ/ 展覧会タイトル	メガ・ウェイブ —新たな総合に向けて	アートサーカス [日常からの跳躍]	TIME CREVASSE タイムクレヴァス	OUR MAGIC HOUR —世界はどこまで知ることができるか?—
ディレクター/ キュレーター	[アーティストティック・ディレクター] 河本信治 建島 哲 中村信夫 南條史生	[総合ディレクター] 川俣 正 [キュレーター] 天野太郎 芹沢高志 山野真悟	[総合ディレクター] 水沢 勉 [キュレーター] ダニエル・バーンバウム フー・ファン 三宅暁子 ハンス・ウルリッヒ・オプリスト ヘアトリクス・ルフ	[総合ディレクター] 逢坂恵理子 [アーティストティック・ディレクター] 三木あき子
会期 (開場日数)	9月2日—11月11日 (67日間)	9月28日—12月18日 (82日間)	9月13日—11月30日 (79日間)	8月6日—11月6日 (83日間)
主会場	[2会場] ・パシフィコ横浜展示ホール ・横浜赤レンガ倉庫1号館	[1会場] ・山下ふ頭3・4号上屋	[4会場] ・新港ピア ・日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK) ・横浜赤レンガ倉庫1号館 ・三溪園	[2会場] ・横浜美術館 ・日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK)
参加作家数	109作家	86作家	72作家	77組(79作家)/1コレクション
総事業費	約7億円	約9億円	約9億円	約9億円
総入場者数(有料入場者)*	約35万人(約15万人)	約19万人(約16万人)	約55万人(約31万人)	約33万人(約30万人)
チケット販売枚数	約17万枚	約12万枚	約9万枚	約17万枚
ボランティア登録者数	719人	1,222人	1,510人	940人
主催者	国際交流基金 横浜市 NHK 朝日新聞社 横浜トリエンナーレ組織委員会	国際交流基金 横浜市 NHK 朝日新聞社 横浜トリエンナーレ組織委員会	国際交流基金 横浜市 NHK 朝日新聞社 横浜トリエンナーレ組織委員会	横浜市 NHK 朝日新聞社 横浜トリエンナーレ組織委員会 共催:(公財)横浜市芸術文化振興財団

*入場者数は延べ人数

横浜トリエンナーレ組織委員会 (2013.12.13 現在)

横浜トリエンナーレ組織委員会		事務局	
名誉会長 代表	林 文子(横浜市長) 澄川喜一(〔公財〕横浜市芸術文化振興財団理事長) 松本正之(NHK会長) 木村伊量(朝日新聞社社長)	開催本部長	矢野修司(横浜市)
委員 委員長	逢坂恵理子(横浜美術館館長) 中山こずゑ(横浜市文化観光局長) 風谷英隆(NHK事業部長) 宮田謙一(朝日新聞社企画事業本部長) 櫻井友行(〔独法〕国際交流基金理事)	事務局次長	帆足亜紀(〔公財〕横浜市芸術文化振興財団)
外部有識者	高階秀爾(大原美術館館長) 建島 哲(京都市立芸術大学学長) 宮田亮平(東京藝術大学学長)	事務局長	富士田美枝子(横浜市) 天野太郎(〔公財〕横浜市芸術文化振興財団) 福山浩一郎(NHK) 帯金章郎(朝日新聞社)
アーティストティック・ディレクター	森村泰昌		
オブザーバー	佐藤 透(文化庁長官官房国際課長)		
監事	渡辺好史(税理士)		